



月刊 第517号

暑つちえ盆で

よかつたね

まさに気象庁の長期予報がピタリと当って、梅雨の切り上がりもよく、それと同時に猛暑の

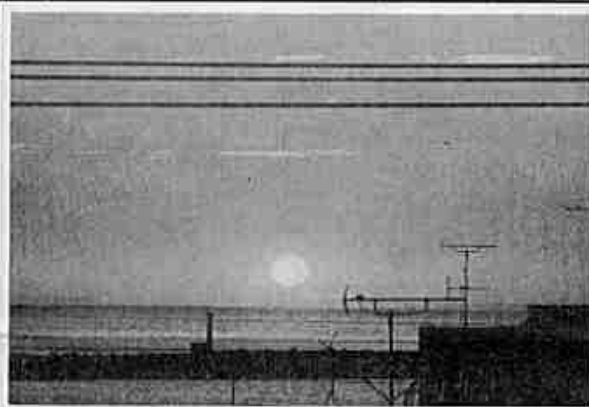
夏となった。「暑つちえね、だけどよかつたね」と挨拶するのは観光関係



の業者。「こんがの夏も滅多にねこんだ、いやーげんなりするね」は一般町民の挨拶。十二日未明からの流すような雨で折角の花市は雨に流された型になったが、十三日の墓参りは風もなく雨の心配もなく夕暮れとともに山ぞいの寺々の墓所には灯りがともりはじめ夜遅くまでその灯はともりつつけて静かな間の中にはの明るくともる灯は自づと先祖をしのぼせるよすがと感じられた。お盆になるとなんとはなしにふるさとがなつかしく里帰りと言ふことになる。なつかしい顔が町に勢揃いす

「いつ来なすたね。久振りだつたねえ」「いやいや、ご無沙汰してまして、達者で何よりだねえ」と挨拶が交される。親戚同志の交流も盛んで、土産物が佛壇の前に並べられる。お互やったりとつたりと言ふところだが、これで身内の確認がなされることにもなる。お墓参りもその通りで、日頃無沙汰にしていた知り合いのお墓にも花を供え灯をともししてお参りする。

「誰も面倒みてくれる人もなくお気の毒に」と言う心が「まったく隣りの墓は掃除もしないで困ったもんだ。折角自分の墓を掃除しても隣の墓のお陰できれいした感じにならんで、ほんとに困ったもんだ、先祖の墓も守らんねようじやどーしよもねこて」と言う具合に。それでも十三日のお墓参りが終ってみると、全く花の供えられていない墓は一つもない位であふれんばかりに花束が供えられていくつももの花束を抱えて親戚知人の墓を詣でる人が多い証である。



だが現実には空家や空家候補の家も多く従って無縁となつてゐる墓も相当数あつて先月号で紹介のように各寺ではそれぞれ形で共同墳墓や寄せ墓が作られてゐる。拙寺のものは「大地碑」と銘名。次のような碑文が銘版に刻まれてゐる。

悲願猶如大地 三世十方一切如来出世故

当山墓地に散在せる墳墓、年を経日を送る中、或いは家督絶え或いは遠く転居を重ねて疎遠となり訪り人なきもの甚だ多し。殊に先の大戦を境に見る人もなく倒壊し又草に埋るもの多く見るに忍びず。

よつて檀信徒発意して互に浄財を募り茲に新らたに共に安ら

りべき墓處を建立してこれ等を合わせ葬つて大地の碑と銘づく。永遠にこの墓前に合掌する人の絶えざらんことを願う。

平成三年四月七日

檀信徒一同

中は三メートル四方高さ二メートルの石室で合葬の形となつており、己にここへの埋葬を予約してゐる方もおられ、今年米寿を迎えたわが老母はここに入ることを希望しており、行くゆくは寺の墓を廃止する心づもりであります。

これからは個人個人のお墓の時代でないような気もいたします。具會一處(ともにひとところ)で會う」と刻まれた墓もあることですからそれをもつと個人の家を越えて広く考えればよいのでしよう。ほとけさまの世界を「広大会」と呼び呼び名もあることですから。

毎年お盆の季節になるとお墓やお葬式のことをマスコミで話題として取りあげられ、どうも寺が身を小さくすくめなければならぬような内容が多いのですが、法外な法名料や布施は都会のほんの一部のところでの相場ではないのでしようか。又お墓なども土地の値上りと他より立派にと言ふ競争心や見栄や執着心が巧みに業者を利用してあるだけで色々な形でもつと自由で考えたらよいのにといつも思つております。勿論共同の墓所へ入るなら無料なんですから。

お盆のせいか話題が妙な方向に傾いてしまいましたが、そのお盆もあつたと言ひ間に過ぎて供花も枯れて果てた状態。

海も盛りを過ぎたやうです。夜には虫の声がしきりで、風も日中は兎も角夜は秋の気配です。沖の漁火も涼風の中で揺れております。

ひとつころは三百張り位に色とりどり型も千差万別賑わつた海辺のキャンプもぐつと数が減りその分残されたゴミが見につきます。

お盆のあと野積の精霊舟を初めて写真におさめました。十六日の朝方各家々一族揃つてお盆中の供物をコモで包み舟仕立にして帆をかけたしの風に乘せて

各寺にはほとんどこの木があり、又町並みにもこれ程百日紅があつたのかと驚くほどです。又蟬も沢山出たやうで久々に大合唱を聞いた思ひです。

各地で悲惨な災害もありましたが、越後平野は美しい稔りの稲穂がたわわで豊作の年になりそうです。魚も美味しい季節を迎え、秋も楽しめる寺泊です。



ふるさとの海へ両親の散骨

七月二十九日熱心なふるさとだよりの誌友であり、平成九年十二月六日逝去された粟津温泉の外山晴厚夫妻の遺族の方々が寺泊の聖徳寺裏手にある外山家墓所にある先祖の墓参りに来町された。

二年余無沙汰にしておられたとのことで墓所は草に埋もれて掃除も大変だったとのこと。一族総出の墓掃除となった。

毎年「七ふく会」と銘打って七月二十九日に一族揃って先祖の墓参りをすると言うのが毎年の慣わしとなっていたのだが、当主が倒れられ亡くなられたことでここ二年ばかりふるさと訪

問が途絶えていたようだ。

ことに今回は故人の希望でふるさと寺泊の海へ両親の散骨をすると言う大切な意味のある訪問であった。

晴厚さんが異常な迄にふるさとと先祖に対する関心をもたれたのは昭和四十五年八月二日の新潟日報に歴史学者の渡辺秀英氏が現寺泊警察署(今は上田町会館と町の駐車場)附近にあった「大外山」外山四兵衛の子孫が粟津温泉の外山晴厚氏であるとの記事を掲載されたのがきっかけで、寺泊、佐渡、長野、能登更にもわたる外山家の家系の調査に奔走された。記憶として

は幼い頃父宇忠に肩車されて当

時己に建物は失くかってそこに構えがあった警察署附近や外山家の墓所につれてゆかれたことが故かに思い出し語り程。

病に倒れられる直前子供達六人夫婦で毎年十二月第三日曜に集る睦美会(一族の毎年の親睦会)を招集、当人のふるさとへの思いを語り亡き後は是非ふるさとの海へ散骨して欲しい旨遺言として丁度二年後に亡くなられたとのこと。

両親の希望に添って、嫁さんと孫さん達が折鶴を折ってそれにお骨をのせて日本海に流したとのこと。

故柳下キイ様より御寄附

故人の遺志で七月十一日享年九十歳で逝去された柳下キイ様御遺族より、ふるさとだより宛に金拾万円の御寄附を頂いた。二十歳代からお茶とお花の師匠をされて凡そ六十年間にどれ位の人達が教えを頂いたことであらうか。

お花は池の坊、お茶は宗廻流を学ばれ、文化祭や良寛茶会など町の文化活動にも積極的に貢献された。

晩年はのんびりと一人暮らしが気楽で一番気性に合っている、時々訪ねる子供さんと孫さん達との出遇いを亦楽しみにしておられた。

いっお迎えが来ますやら、それも又おまかせしておりますからと毎月の読経の際にはそんな会話をかわすことが多かった。

授かりもののいのちであり、お迎えを頂いて終ってゆくいのちであることを素直に背いておられる晩年の姿であった。

季節季節のお菓子と茶碗を用意して下さって頂いたお茶の味がなつかしい限りである。

法名は茶道と花道で頂いている号をそのままつけて欲しいとの生前からの希望であったので柳下院釋尼清翠とおつづけた。やがて四十九日も目前である。御寄附頂いた分はふるさとだよりの基金に入れさせて頂き、感謝しつつ御報告申上げる次第。

平成11年 8月20日

ふるさとだより

(昭和32年1月18日)
第二紙郵便物誌

第513号 (毎月20日)